

Melville における言語的過剰と意味的不毛 — “The Lightning-Rod Man” を中心に

別所 隆弘

序

1854年に書かれた Melville の短編 “The Lightning-Rod Man” は、他の短編、例えば “Benito Cereno” や “Bartleby” とは比較にならないほど、言及の少ない作品である。その最大の原因は、他の作品に比べて内容が軽いという点につきるだろう。だが、“The Lightning-Rod Man” という作品は、その軽さから来る小さな完結性ゆえに、普段は隠蔽され、偽装されている Melville の意図を、かなり率直で簡明な形で我々に伝えるものになっている。では、“The Lightning-Rod Man” が我々に伝えてくる Melville の意図とはどのようなものなのだろうか。考証を通じて、それが雄弁と不毛の連関であることが示される。より正確に言うならば、「言語的な過剰」が「意味的な不毛」を生み出すというパラドックスに対する批判的な言及である。この二つのキーワードを使って、この時期に書かれたいくつかの短編との関連性を考慮にいれながら、“The Lightning-Rod Man” に通底するこの「雄弁」/「不毛」というテーマの素描を行うのが、本稿の目的である。

I

冒頭、山中の屋敷の中で、嵐の空に光る稲妻を独り楽しむ語り手のところに、予期せぬ訪問者がやってくることから物語は始まる。この二人の人物だ

34 Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に
けが登場人物であり、物語は彼らの言葉の応酬に焦点を置いて進められるの
だが、この冒頭から、すでに彼らの対照は象徴的に描き出されている。語り
手である「私」の最初の言葉は、“What grand irregular thunder” (118)¹で
ある。彼は、人里離れた小屋の中で独り生き、普通の人間ならば恐れる稲光
の中に彼独自の喜びを見出す人間であり、その意味で俗世間から精神的にも
隔絶した人物である。後にこの語り手である「私」が、“the returning
stroke” (122) に独り喜ぶシーンからわかる様に、可能ならば天にでも反逆の
狼煙を上げたいと願う人物でもある。²彼に重ねられているのが、Ahab や
Pierre に代表される、Melville 的な反骨的単独者のイメージであることは
明白だろう。

一方、訪問者の登場は語り手にこのように評される。

“why don't he, man-fashion, use the knocker, instead of making
that doleful undertaker's clatter with his fist against the hollow
panel?” (118)

この部分で読みとることが出来ることは、象徴化された訪問者の不能のイメ
ージである。“man-fashion” という言葉が示唆する男根象徴としての“the
knocker”を使わないで、“that doleful undertaker's clatter”で訪問を告げ
るという去勢を暗示する描写が伝える不能性は、例えば“Benito Cereno”に
おける Benito の有している不能性と同様³、この種の男が代表している非
生産性を伝えている。だが、ここでさらに重要な点は、最初の時点から、語
り手が訪問者に対してある種の嫌悪感を抱いている点である。それにも関わ
らず、語り手の訪問者に対する言葉は慇懃丁寧である (“Good day, sir”,
“Pray be seated” など)。結果、この語り手の訪問者に対するセリフは、常
に二枚舌的な色彩を帯びることになる。⁴それゆえ、彼らの会話は最後の破綻

Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に 35
の瞬間を迎えるまで、ついに一度も通じ合うことなく無意味に進んでいくこ
とになる。ここにも、ある種の非生産性、ないしは不毛性を読み取ることが
出来る。無意味に量産される言葉と、その結果どのような意思疎通も生み出
さないという不毛性。冒頭から読者に提示されるのは、このような二重の意
味での不毛性である。そしてこの不毛性を中心軸にして、語り手と行商人で
ある訪問者の会話のやりとりが繰り返されることになる。

仕掛けにあふれた冒頭のパラグラフを経て、行商人は語り手である「私」
の家に導かれる。このとき初めて訪問者の姿を目にした語り手が行商人を描
写する言葉には、Melville の著作に繰り返し出てくる中心的なテーマのひ
とつが展開されている。

“His singularity impelled a closer scrutiny. A lean, gloomy figure.
Hair dark and lank, mattedly streaked over his brow. His *sunken
pitfalls of eyes* were ringed by indigo halos, and play with an
innocuous sort of lightning: the gleam without the bolt.”

(my italics, 118)

イタリック体で強調された単語を見てもらいたい。「落ちくぼんだ穴の様な
目」は「雷を失った稲光の様な、無害な光」で満たされている。これらの描
写で強調されるのは、訪問者の「目の空虚」と、“innocuous”という単語か
ら連想されるある種の白痴性である。この種の空虚さは、例えば“Bartleby”
における弁護士や、Amasa Delano らに顕著だが、“The Paradise of Bachelors
and the Tartarus of Maids”の第二部の中に出てくる、不断に“blank
paper”(328)を作り出す工場の生産システムの中にも象徴的に描き出されて
いる。「乙女達の地獄」と名づけられているこの後半の物語の、その地獄と
は、機械化された工場システム下において、乙女たちが機械の奴隷となりな

36 Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に
がら作り出しているのが、それ自体としてはどのような意味も持たない、“blank paper”という空虚でしかないということである。このような空虚さ、あるいは blankness は、それを持っているのが人であれ、物であれ、あるいは状況であれ、常に付随する属性としての雄弁性が与えられている。“Bartleby”における弁護士も Delano にしても字義通りの雄弁を有しているし、“The Tartarus”における工場システムも、そのグロテスクなほどに高い生産性が雄弁を暗示している。しかし、こうした雄弁を前にした人物は、雄弁な言葉の下に隠された意図を、沈黙の仮面の下から告発する。Bartleby が弁護士と一度としてまともな会話をしなかったように、あるいは、Delano を前にした Babo が、従順な奴隷の仮面の下で、彼自身の本当の声は一言も表に出さなかったように、彼ら「沈黙する他者」はその沈黙の下で、雄弁の生み出す不毛へ強い批判の視線を向けているのだ。⁵

“The Lightning-Rod Man”における語り手と行商人との関係も、このような形を踏襲している。雄弁を操るものは、Melville の作品では常に空虚なイメージとともに語られる。⁶この作品において雄弁を操るものである行商人も、「落ちくぼんだ穴の様な目」と「雷を失った稲光の様な、無害な光」によって、その空虚さが強調されている。一方、訪問者とは対照的に、語り手は“a closer scrutiny”のために、訪問者を黙ってじっと見つめている。彼の視線には、訪問者にはない強い意志のあることが、訪問者を描写する視線の詳細から読みとることが出来る。冒頭からのこの行商人に対する反感を基盤にして、語り手の視線は行商人の姿を批判的に描き出す。このように「雄弁」/「不毛」を批判する「沈黙する他者」という Melville 好みの設定が、物語の冒頭直後にすでに描きこまれているのである。

II

行商人の有している空虚さは、彼の目についての描写から読み取ることが出来る。この「空虚な目」についてはもう一度後に取り上げる。一方、彼の雄弁は、まだこの時点では明白になっていない。次に、語り手と行商人の間で交わされる会話について分析を進める。

この物語には、この二人の会話以外に目だったアクションは存在しない。最後の場面において慇懃の仮面を脱ぎ捨てた語り手が、行商人を放り出すシーン以外の記述は、おおむねこの二人の会話を伝えるのに終始する。それゆえに、この二人の会話のシーンは、その内容だけにとどまらず、形態にも注意を向ける必要があるのだ。

最初に注目しておくべきことは、この会話が基本的には不通であるという点だ。基本的に二枚舌的な言葉を使う語り手が、嘲笑的に行商人を見下しているという点において、内容的に不通であることは確かなのだが、むしろここで強調したい不通は「物理的な不通」である。彼らの間に交わされている会話は、行商人の雷鳴に対する驚きの声 (“Good heavens!” (119), “For Heaven’s sake”(120), “Hark!” (121), “Hold!” (121), “Crash!” (121), “Awful!” (121), “Hark!” (122), “Hark!—the rug!, the rug!” (123), “Hark!—Dreadful!” (124)) によって、しばしば寸断される。このような物理的な寸断によって、会話は継続的な内容を語ることなく、次から次へと脱線していく。さらに興味深いことは、彼らの会話がこの驚きの声によって寸断され、どんどん脱線していくのと対照的に、寸断の後の行商人の言葉が、次第に狂信的な色彩を帯びてくることだ。最初の雷の後の行商人の言葉は、“I warn you, sir, quit the hearth” (119)、すなわち「警告」であるが、しかしそれはすぐに“a strange mixture of alarm and intimidation” (120) を経て、“command”

38 Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に (120) へと変化する。それに比例するように、雷を描写する言葉も、過剰さを増していく (“what Himmalayas of concussion” (120), “a deadly explosion” (121), “Think of being heap of charred offal, like a halted horse burnt in his stall” (124) など)。これらの言葉に自ら触発されたかのように、行商人自身の自らの避雷針を恃む態度も高慢なものになっていく (“They (Canadian) should have mine, which are copper. Iron is easily fused... Those Canadians are fools... Mine is the only true rod.” (121) など)。この様な行商人のある種の fanatic な姿を、ピューリタンの説教師の姿と重ねあわせるという考証は、これまでいくらかの批評家たちによってなされてきたところである。⁷ この見解をさらに補強するのが、先にあげた行商人の驚きの声、説教の際に説教師たちの教会で使う言葉に類似している点である。⁸ つまり、行商人の言葉は、説教師の言葉との類似において、ピューリタンの意味合いを暗示的に伝えているのだ。では、この行商人の言葉が説教師との関連があるすると、そこにわれわれは何を読み取るべきなのだろうか。滑稽で、胡散臭い行商人の姿を通して、Melville はピューリタニズム批判を行っていると考えべきなのだろうか。おそらく、そのような単純な形でのピューリタニズム批判は、ここにはないだろう。それどころか、Ahab の中に存在する、不可知なもの—Moby-Dick をひたすら猛追する情念は、Melville のカルヴァニズム—ピューリタニズムに対するある種の共感すら見出すことが出来る。そのような Melville の信仰に対するスタンスを考慮に入れると、Cotton Mather や Jonathan Edwards らに代表される、不可知なる存在への信仰を基盤にした熱烈な宗教心は、行商人よりも、むしろ語り手である「私」の中にこそ強く息づいているといえるだろう。すなわち、この作品の中にあるピューリタニズム的な要素は、行商人と語り手の両方に存在してい

Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に 39
るのだ。⁹ゆえに、Melville の批判の矛先はピューリタニズムそのものに対して向けられているのではなく、行商人によるピューリタニズムの利用であり、利益追求の本心を宗教的言説によって隠蔽するその図式である。この図式の信憑性をより高めるのが、行商人の言説に組み込まれた合理主義思想の要素、すなわち Benjamin Franklin 的な要素である。¹⁰この Franklin によって代表される合理主義的プラグマティズムがピューリタニズムの中に侵食してきたとき、ピューリタンの言説は他者の恐怖を煽る道具として利用される。そして、自らの言説で与えた恐怖を、理性的に、あるいは効率よく回避するために、理性によって作り出された科学とその結果としての道具が売りつけられる。このとき、恐怖を作り出した言説は、最終的に利益を上げるために利用された媒介にしかすぎない。つまり、この行商人が行っていることは、利益追求のためのピューリタニズム的言説の利用でしかないのだ。その結果、Cotton Mather や Jonathan Edwards によって代表される純粋なピューリタニズムの持っていた、“The power of blackness”¹¹への畏怖は失われ、その代わりに、偏狭な排他性と過剰な言説の方法論のみを受け継いだ、形骸化した偽のピューリタニズムだけが残るのだ。行商人の中に混在しているこのピューリタニズムとプラグマティズムの関連を見つけたときに、われわれは Melville の批判の矛先を、ようやく知ることが出来る。

最終的に語り手が暴露したこの行商人の本質は、“False negotiator” (124) である。この言葉は、二重の意味を有している。第一には、字義通りの意味での、「ベテン行商人」としての意味。もう一つは、「偽の神の代理人」としての意味である。この後者の意味に込められた虚偽性とは、あたかも説教師の様な言説を使って他者の恐怖を煽りながら、その目的が神への帰依ではなく、自分自身の利益追求であるということだ。説教師としての役割を演じな

40 Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に
から、しかも同時に Franklin 的なプラグマティズムも体現したこの行商人
の姿の中に、形骸化した偽のピューリタニズムへのメルヴィルの批判的意図
が暗示されているのではないだろうか。¹²

以上のこと、すなわち、行商人の中にあるピューリタニズムとプラグマテ
ィズムの色彩、そして行商人の他人の恐怖につけいる商売の方法を考慮にい
れてはじめて、“False negotiator”という語り手の批判の言葉は、神の栄光
を私利のために利用する、偽の神の代理人への批判の響きを有していること
に気づくのである。その意味で、構造的な「物理的伝達不全」は、単なる脱
線への導火線として働くのみならず、物語のテーマ、すなわち偽の代理人に
よって生み出される「雄弁」が、いかなる積極的な交渉も生み出さないとい
う、ここにも確認できる「雄弁」/「不毛」のテーマへと、繋がっているので
ある。

III

このような似非ピューリタニズムに対する批判は、それ自体独立したテー
マとして扱うことが可能な大きなものであるが、本稿ではこれ以上はふれな
い。再度、語り手と行商人の会話を形式的な観点から分析してみよう。

先に述べた通り、行商人の言葉は、自らの驚きの言葉によって脱線してい
くたびに、次第に狂熱的な色彩を帯びてくる。最初は警告の言葉であったも
のが、次第に命令へ。雷の描写は、より恐怖をおおるものへと変化していく。
そしてそれを語る行商人の姿は、自らの言葉に触発されたかのように高慢に
なっていく。しかし、その様な内容的なエスカレーションとともに、行商人
の語る言葉は、文字通り物理的に量が増えていくのである。すでに述べたよ
うに、この物語の主な焦点は二人の会話のシーンである。その主要な場であ

Melvilleにおける言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に 41

の会話部分において、セリフ量の物理的な変化には注意を向けるべきだろう。当初、二人の会話はおよそ等分になっている。むしろ、語り手自身が行商人に語る言葉の方が多きほどだろう。しかし、行商人の言葉や態度がエスカレートしてくるにつれて、次第に語り手の言葉は、行商人の言葉に対する短い質問へと変化し、量的にも少なくなっていく。これらの変化が意味しているものは二つ。第一には、行商人の雄弁が、苛烈を極めれば極めるほど、それは聞き手に疑問をしかもたらさず、必然的に質問か沈黙を強制されるということ。すなわち、行商人がその雄弁を駆使すればするほど、意思疎通はより深い不通へとすすみ、言葉はその不毛性をいっそう露わにするのである。もう一つには、語り手の沈黙が、その様な雄弁の隠蔽する欺瞞を見抜くための仮面であること。行商人の狂信が頂点に達し、およそ1ページを彼一人の言葉で埋め尽くした直後、同時に語り手もまた、この行商人を見切るのである。そして、この行商人をすでに挙げた言葉、“False negotiator”として、彼の屋敷から追放することになるのだ。冒頭のページから積み重ねられてきた、「雄弁」と「不毛」の連関が、このシーンで明らかになっている。およそ1ページに渡る言語的過剰は、結局互いのコミュニケーションの成立に、どのような意味においても寄与していない。それは、決定的な意味的不毛を露呈しているのである。

さらに、このような意味的不毛が、“ease” (124) という言葉に対する語り手と行商人の意識の違いの中に反映されている。仮面を脱ぎ捨てた語り手は、行商人に向かって言う。この言葉は、行商人に投げつけられる、はじめての本心の言葉だ。“I stand at ease in the hands of my God.” (124) しかし、行商人の語る言葉もまた、雷に怯えなくてもすむという“ease”を旨としたものである。しかし、そのような形での“ease”が、決して本当の“ease”に結

42 Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に
びついて行かないことを語り手は見抜いている。冒頭のシーン、語り手と行
商人が初めて対面する瞬間を、もう一度見てみよう。この時語り手は、行商
人の目の回りに出来た“indigo halos” (118) について描写している。この描
写は、この行商人が、いかに病的に雷を恐れているかを示している。雷から
逃れ、“ease”を手に入れたはずの行商人に、どのような形の“ease”ももた
らされていないことが、目の回りできあがった隈によって示されている。雷
におびえ、次から次へと“ease”を求める行商人は、部屋の真ん中こそが安
全と考えてそこを動かず、炉端は危険なのでそこには出来るだけ近寄らず、
伝導体になるからといってずぶぬれの体を乾かそうとしない。そのような行
商人の強迫的に“ease”を求める姿は、彼にとっての“ease”が、次のより確
実な“ease”を生み出さねばならないという強迫観念、いわば“disease”に
しかかっていないということを示している。¹³しかし、行商人はそのような
自らの状態には気付かない。語り手は、気付いている。最後までその関係は
変わらず、結局彼らは、事のはじめから、一度として意志を通じ合わせない
ままに、物語は終わるのだ。

IV

最後に、この「雄弁」/「不毛」というテーマが、「見ること」あるいは
「視線」のイメージを伴って展開されるというこの仮説じみた着想を展開し
てみたい。すでに述べたとおり、この“The Lightning-Rod Man”に出てく
る行商人は、空虚な目をした人物である。このような空虚な目をした人物が
雄弁な言葉を生み出すという構図は、Melville 作品には繰り返し出てくる。
同様の「空虚な目」と「雄弁」の組み合わせで真っ先に思い出すのが
“Benito Cereno”の Amasa Delano の存在である。

Delano の視線は、多様を求めて船上の対象を次から次へと移っていく。自分と他者の間にある差異こそが、彼を他の存在から切り離し、彼の安全を保障するものであるからだ。しかし Delano の視線は、表層に浮かび上がった黒と白の差異にとらわれる余りに、繰り返して出てくる「灰色」のイメージに象徴される、同一性を見つけることが出来ない。¹⁴ Delano の視線には、単に風景を映し出す鏡としての機能以外の何物も存在しないからだ。Delano の視線が示すこの多様性への欲求は、同時に、それを語る彼の雄弁へと結びついている。しかし、彼はその空虚な視線ゆえに、船上で行われている仮面劇の本質を見ることなく、それが最終的に彼自身の命を救う。「見なかったもの」が、「助かる」のである。

これと同じ構図が、“The Paradise of Bachelors and the Tartarus of Maids” に組み込まれている。“The Tartarus of Maids”において、語り手の「私」は、工場の見学をしたいと申し出る。この工場とは、すでに述べた、乙女たちが奴隷のように仕える製紙機械のある工場である。この工場に入る直前、Melville は語り手に奇妙な比喩を語らせている。“Two gaunt bloodhounds, one on each side, seemed mumbling them. I seemed Actaeon.” (329) Actaeon とは、ギリシャの神話にでてくる猟師のことである。猟師は、女神ダイアナが水浴びをしている様を覗き見たために、自分の猟犬にかみ殺されることになった。つまり、ここで Melville は、語り手に Actaeon の役割を与えることで、中の工場の機械を「覗き見」してしまえば、破滅が待っていると言うことを暗示している。しかし、この語り手も最終的には破滅しない。彼もまた「空虚な目」を持つ男であり、Delano と同じように、何も見ない男であるからだ。

“The Tartarus”における語り手が空虚な目を持つ男であることは、この

44 Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に小説の前半 “The Paradise of Bachelors” における語り手が空虚な目を持った人物であり、さらに、この「楽園」における語り手と「地獄」における語り手が、おそらく同一人物であると類推できることから導かれる。「楽園」における語り手の「独身男」は、「独身男たちの楽園」と呼ばれる部屋で、享乐的なパーティーに興じる。パーティーは、極めてきらびやかに「見える」メニューによって描写される。“ox-tail soup”, “turbot”, “roast beef”, “mutton”, “turkey”, “chicken pie” など。しかし、これらの料理は、よく見てみると、どれもこれも本来はそれほど豪華な食事ではない。むしろ、イギリスの食卓に普通に出てくる、家庭料理であるといってもよい。¹⁵つまり、これらの料理は、語り手である独身男の雄弁な描写によって、まるで最高の御馳走であるかのように見せかけられるが、実はそうではないのだ。

一方、この料理の貧困さを埋め合わせるかのように、ここに集まった独身男たちは、ひたすら乾杯をあげる。酒を飲むことでパーティーを維持し、酒を飲むことで時間をつぶしていくのである。彼らのこの半永久的な乾杯の循環の意味を、Melville は二つの描写を使って、読者に提示する。一つは、“a wine-chronometer” (322) という比喩。もう一つは、“an invalid bachelor” (322) という単語。この二つの描写が示す独身男たちのイメージは、いつかは崩壊する、不毛な存在としての独身男である。恒常的で絶え間のないアルコール摂取を象徴する「ワイン時計」、そして、そのなれの果てを示す「病身の独身男」。男ばかりしかいない「独身者の楽園」で繰り返されている宴会もまた、ただひたすら酒を飲んで最終的には崩壊していく「不毛の地獄」でしかないのだ。それは結局、子孫を残さない独身男であるという究極的な不毛性を示す彼らの身分によって、最初から運命づけられているのである。このような不毛な存在としての「独身男」である語り手と「乙女たちの地獄」

Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心に 45
に出てくる語り手が同一であり、しかもそれはデジャヴという、見ることを
強く喚起する描写によって示唆されるのだ。(326)そしてこの「語り手」は、
「独身男たちの楽園」では自らの雄弁によってパーティーの不毛を隠蔽し、
そして「乙女たちの地獄」では、覗き見してしまえば本来は破滅しか待って
いないはずのところを回避していく。ここでも生き残るのは雄弁な男であり、
そしてその雄弁さは「視線」のイメージとともに展開されている。

このように、Melville 作品の中においては、「見る」ということと、「雄
弁」/「不毛」、これらが密接に絡み合っているようだ。しかし、ここではこ
れ以上は展開する余地がない。Melville 作品を読む際の一つの作業仮説を
提示することで、次への橋渡しとしておきたい。

注

- 1 Melville, Herman. *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. eds. Harrison Hayford et al., Vol. 9 of *The Writings of Herman Melville, The Northwestern-Newberry Edition*, 15 vols (Evanston: Northwestern UP, 1987). 本文中に引用した Melville の短編からの引用は、この版によるものとし、引用末尾の括弧内に頁数を示す。
- 2 Dillingham は、世界の圧力に反抗する語り手を “Self-glorification” の観点から論じ、その姿をタイトルの “The Lightning-Rod Man” という言葉のもう一つの隠された意味、すなわち、荒れ狂う稲妻の中で「人間避雷針」として天にはむかう語り手の姿をも表していると言っている。(Dillingham, William B. *Melville's Short Fiction, 1853-1856* [Athens: U of Georgia P, c1977] 168-182.)
- 3 Dillingham 256
- 4 Dillingham もこの部分における語り手の二枚舌的な言葉の使い方については言及しているが、それ以上には展開していない。
- 5 Maddox は、「主体」としてのアメリカの「沈黙する他者」との遭遇体験と、

- 46 Melville における言語的過剰と意味的不毛—“The Lightning-Rod Man”を中心にそれを圧殺し塗り替えていった雄弁の歴史を描くことが、Melville の関心事であったと述べている。(Maddox, Lucy. *Removals: Nineteenth-Century American Literature and the Politics of Indian Affairs* [New York: Oxford UP, 1991])
- 6 “Benito Cereno” における Delano もまたこの様な類の「空虚さ」を有しているが、Dillingham は、このような空虚さを Melville 作品に偏在する、核心のない永遠の表層性として規定している。“Whenever one layer of false perception has been cut away in order for bare reality to be seen below, that reality proves to be only another layer of appearance.” (Dillingham 230)
- 7 特に Leyda は、Cotton Mather の *Magnalia Christi Americana*, “Ceraunius” 中の説教師との類似を指摘したことで、この種の解釈に強い根拠を与えた。(Leyda, Jay, ed. *The Complete Short Stories of Herman Melville*. [New York: Random House, 1949])
- 8 “Like the dun in church he makes his appeals in God’s name.” (Dillingham 172)
- 9 Dillingham 177.
- 10 19 世紀アメリカ文学における、Benjamin Franklin と Cotton Mather の関係を扱ったものとしては、Gilmore の “The Middle Way” を参考にした。(Gilmore, Michael T. *The Middle Way: Puritanism and Ideology in American Romantic Fiction*. [New Brunswick, N.J. : Rutgers UP, 1977]) また Fisher は、行商人の中にある、Franklin 的な要素とピューリタンの要素の関係について分析をしており (Fisher, Marvin. *Going Under: Melville’s Short Fiction and the American 1850s*. [Baton Rouge: Louisiana State UP, c1977] 118-124)、さらに Emery は Fisher の観点を押し進め、19 世紀アメリカにおける Franklin 的なドグマの浸透を、行商人の言動の中に読みとることが出来ると論じている。(Emery, Allan Moore. “Melville on Science: ‘The Lightning-Rod man,’” *New England Quarterly* 56 [1983] 555-68.)
- 11 Melville, Herman. “Hawthorne and His Mosses,” *Nathaniel Hawthorne’s Tales: Authoritative Texts, Backgrounds, Criticism*. (New York: Norton, c1987)

341.

- 12 ピューリタン説教師の 19 世紀における産業との癒着を象徴的に示す例として、当時アメリカ全土を回った Yankee Peddler の存在がある。彼らと行商人との類似は、Parker によって指摘されている。(Parker, Hershel C. “Melville’s Salesman Story.” *Studies in Short Fiction* 1 [1964] 154-158.)
- 13 Emery 56. Emery は、Franklin の ease あるいは safe に対するある種の obsession が、dis-ease にしかなっていないことを指摘し、その意味において Franklin は行商人の double であると論じている。
- 14 “His (Delano’s) is the vision of colors, of differentiation.... His eyes go everywhere...” (Dillingham 247)
- 15 “The Narrator calls the meal a feast, but the food is mostly plain English fare.” (Dillingham 191)